The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス映画を用いた推論力育成授業 : 課題探求能力育成のための実験的試み
Author(s)	和多, 則明
Citation	大阪外国語大学論集. 2003, 28, p. 203-226
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79910
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪外国語大学論集第28号（2003年）

フランス映画を用いた推論力育成授業
−課題探求能力育成のための実験的試み−

和　多　則　明

LES TRAVAUX PRATIQUES OÙ EST UTILISE UN FILM FRANÇAIS POUR FORMER LA FACULTE DE RAISONNEMENT

WADA Noriaki

La faculté de raisonnement qui nous fait connaître la réalité au-delà de notre sensation est un des moyens fondamentaux pour toutes les recherches scientifiques, surtout pour celle sur les sociétés humaines. Puisque, sans cette faculté, on ne peut pas comprendre non seulement l'intérieur d'autrui qui est un moteur du mouvement de toutes les sociétés humaines, mais aussi le total des intérieurs des hommes. En conséquence, on ne peut pas construire une hypothèse importante sur la société humaine.

Mais cette faculté fondamentale n'est pas suffisamment formée chez les étudiants japonais par l'enseignement antérieur à celui de l'université. Dans ces circonstances de l'enseignement japonais, quelques films français qui sont difficiles à comprendre sans la faculté de raisonnement sont les matériels pédagogiques absolument indispensables à la formation de cette faculté.

Cet article présente une méthode expérimentale pour l'enseignement universitaire nouveau, lequel est officiellement demandé de nos jours au Japon.

− 目次 −

はじめに
(1)映画『サンドイッチの年』の概略
(2)トレーニング実施授業
(3)設定したトレーニング問題
(4)学生達の解答分析
むすびにかえて

はじめに

平成3年に出された大学審議会答申では，今後の高等教育において自ら考え判断する能力の開発が最も重要な課題として示されている。その自ら考え判断する能力は，平成10年の大学審議会答申になると課題探求能力としてより具体的に展開されている[1]。答申の中で求められているそれらの能力は，詳しくみるとさまざまな能力から構成されていると思われるが，これまでの卒業論文の指導や審査の経験からいうと，とりわけものごとについての推論力が重要な構成能力であると考えられる。ここで推論については，「人間が感覚ではとらえることができないことについてなんらかの根拠に基づいて論理的関係によってとらえること」と定義する。類似の行為である推測とは根拠の有無によって区別され，想像とは，イメージか論理かという違いによって区別できるものといえるだろう。

この推論力は，科学や学問にとって不可欠の力であると考えられる。なぜなら，科学や学問の場合，社会や経済全体にしろ，人間の心理にしろ，宇宙の果ての問題にしろ，歴史的問題にしろ，未来の予測にしろ，感覚によってとらえられないことをとらえることが重要な課題の一つであるからである。実験などによって感覚で確認できることを除くすべての対象が，厳密な推論によってしか認識できないといえよう。とりわけ社会科学の場合には，社会的動きの根本的原因としての一人ひとりの人間の心の動きと，その総和としての社会の全体的動きは推論に頼る以外に方法がないという問題がある。

しかし，これまでの卒論指導や審査の経験からいうと，学生たちの大学卒業時点での推論力は決して十分なものではない。そのため，授業においてさまざまの方法によって学生達の推論力を開発するトレーニングを行なってきているが，その一つの方法である映画を用いたトレーニングの具体的な例を紹介し，学生の解答を分析し，大学における科学教育のひとつとして，映画を用いた推論力トレーニングを位置付けることが本稿の目的である。

(1)映画『サンドイッチの年』の概略

これまでの授業で推論のためのトレーニングとしていくつかのフランス映画および場合によってはアメリカ映画を用いてきているが，本稿ではその中の代表的教材であるフランス映画の『サンドイッチの年』(Les Années Sandwiches) を例として用いている。

この映画の制作年は1988年であり，同名の文学作品を原作として制作されている[2]。主演しているのはトマ・ラングマン（Thomas LANGMANN）とヴォィチェフ・プショニャック（Wojciech PSZONIAK）である。

映画の時代背景は第二次大戦直後であり，授業においてはフランスにとっての第二次世界大戦やレジスタンス運動の意味，という講義内容の一部として用いている。それとともにこの映画の場合は，ユダヤ人が主人公になっているためフランスやヨーロッパにおけるユダヤ人問題の説明のきっかけとしても用いている。

主人公は，第二次世界大戦中にナチスによって両親を強制収容所に奪われたユダヤ人少年（ラングマンが演じるヴィクトール）であり，その少年が，頼る家族がないまま同じユ

ダヤ人の老人（プショニャック演じるマックス）に雇われて，第二次世界大戦直後のパリで戦後の人生を生き始める姿がストーリーの中心になっている。

映画は時代背景となっている第二次大戦直後のシーンではなく，1980年代末のフランスのシーンから始まる。ユダヤ人の経営する電気製品店が民族差別主義者に襲われて，その連絡が店の主人に届くシーンがそれである。破壊された自分の店にかけつけた店の主人が捜査官らしき人に名前を聞かれ，胸を張って答える。「ヴィクトール・ラヴィンスキー」，それが主人の名前であり，映画の主人公少年の成人した姿である。

その事件をラジオのニュースで聞き，少年時代のヴィクトールとの関係を思い出すのが，同じように成人した準主人公のフランス人フェリックスであり，そこからシーンが地下鉄の切符の落下とともに切り替わり，第二次大戦直後のパリの地下鉄を出発点にした回想シーンが始まる。

両親が強制収容所に連行されるときに無事自分だけ逃れ，地方に疎開していたユダヤ人少年ヴィクトールが両親を捜して単身パリを訪れ，地下鉄で地理がわからないでいるときに，フランス人少年のフェリックスに出会い，映画の中のふたりの関係が始まる。結局両親に出会えなく身寄りのない孤児となったユダヤ人少年は，同じユダヤ人で骨董屋を営む老人と出会い，骨董屋で働きながら新しい人生を歩みはじめる。ユダヤ人少年のヴィクトールを主人公に，準主人公のフェリックスと，同じく準主人公といえるユダヤ人老人マックスの3者の関係の中で，いくつかの事件が生じ，それを通して少年ヴィクトールの成長が描かれていく。そしてストーリーの最後に至って初めて映画のタイトルの『サンドイッチの年』という意味が明らかにされる。

以上がこの映画の概略である。

これまでの学生達のこの映画への反応全体については別の論文で分析した[13]。準主人公が二人いて焦点をしぼりにくいことから，ストーリーやテーマがわかりにくいと感じる学生もいるが涙を流すほど感動する学生もいるといったかたちで学生達はこれまで幅を持ったさまざまな反応を示している。

(2)トレーニング実施授業

その映画を観て推論力育成のためのトレーニングを実施した授業は主として1・2年生を対象として開設されている授業であり，本稿に直接関係するのは2001年度の月曜日の5限に昼間主と夜間主に共通するかたちで設定されていたものである。

この授業はそもそもが，プレゼミ的な性格を持たせて優れた卒論を書けるような基礎訓練をすることに目的があったが，当初の予想に反して受講者が多いためにゼミ的な授業は不可能になっている。ちなみに2001年度の履修登録者数は150人である。そのうち今回のトレーニングに参加している学生の総数は92人である。その内訳をみると，全体の59.8%にあたる55人が1年生であり，37.0%にあたる34人が2年生となる。残り3人のうち2人が3年生，1人が4年生である。全体の59.8%が1年生であるから，大学に入学する前の推論力を知るうえで重要なデータとして役立つだろう。

学生の専攻別でみると，参加者の77.1%にあたる71人がフランス語専攻であり，残り21人が他専攻である。

昼夜所属別でみると，昼間主に所属している学生が68人，夜間主に所属している学生が24人である。夜間主に所属している学生の年令構成はさまざまであるが，年令構成についての正確なデータは集めていない。

その授業において，2001年度10月の第4週と11月の第1週に分けて映画を観た直後に単位評価に関係のあるテストとしてトレーニングを行なっている。これまでの経験では，どういうかたちであれテストという名前がつくと，学生達は普通の授業以上にエネルギーを注ぐ傾向がみられることから，トレーニングの場合であっても，テストという名前をつけた方が教育効果が高いように思われる。

次に，その授業でトレーニングとして設定した問題について触れる。

(3)設定したトレーニング問題

一般的にいえば，映画の中には，映像と音声によってさまざまの感覚的情報が含まれている。映画の内容についてのナレーションが入る場合を除くならば，それらの映像や情報は言語によって関係づけられているわけではないから，映画を観る側が感覚的な情報を根拠に推論する必要がある。たとえば，あるシーンから別のシーンに切り替わったときに二つのシーンをどのように関係づけるかという問題も，映画の中に説明があるわけではないから，観る側一人ひとりの推論や解釈の問題ということになる。おそらくは，映画を観ているとき，観る側は無意識のうちに，ある意味では条件反射的にそのような推論を行なって，映画のストーリーを理解しているという仮説をたてうるだろう。その意味では映画を観て理解しうるということ自体が考える力を前提としていることになる。そのことが明確になるのは，学生たちが映画を観たあとに書く感想の中で，ストーリーがわかりにくかったと指摘しているような場合である。映画の場合には活字化されたものと違って，ビデオなどで再度観る場合を除いて，推論は現実の経験に近く一度きりの過程となり，その分だけ実践的でスピードの速い推論が求められることになる。そのためストーリーの理解に関して学生の力の差が明確に示されることが多い。

映画の中のそれらの映像と音声の情報は，映画監督をはじめとする製作者達が意図的に設定したものである場合もあれば，彼らの意図には関係なく偶然そうなっている場合もありうる。映画監督達が意図的にそうしている場合には，映画の中にある映像や音声についての情報に基づいて推論を建てるということは製作者達の映画制作意図について解釈するということにほかならない。それに対して意図的に設定されていない場合には，映画製作者達も気付いていない現実や事実についてのオリジナルな推論となる。

考えるということが基本的に論理というものを考えることにあるとすれば，論理というのはものごとの関係についての人間による認識であるから，映画の場合には，映画の中のさまざまの映像や音声を少なくとも二つ以上選びだして関係づけるか，映画の一つのシーンを映画の外の別の問題に関係付けることが考えるということの内容になる。したがっ

て，映画の内容に関係させてトレーニング問題を設定するということは，最も簡単な問題としては，映画の中の二つのシーンを選びだして，その関係をめぐって考えさせることである。とくに一見無関係のようなかたちで離れている二つのシーンを関係付けることがトレーニングとしては重要となるだろう。

映画『サンドイッチの年』の中で，準主人公のフランス人少年が，叔父の経営する会社を訪問し，女性秘書の前で帽子をとらないために叔父に皮肉を言われ，それでも帽子をとらなければいけないことに気が付かず，叔父に叱られるシーンがある。叱られたそのフランス人少年はそのことに気が付いてあわてて帽子をとる。そういうシーンがあって，映画の中の時間からいうと数日あと，そのフランス人少年と，主人公のユダヤ人少年がバスにのって映画を見にいくシーンがある。バスの中で二人の座席の前に二人の修道女が座る。そのことに気が付いたユダヤ人少年は帽子をとるが，フランス人少年の方は，ユダヤ人少年のその行動が目の前にあるにもかかわらず，加えて，数日前に叔父に帽子のことで叱られているにもかかわらず，帽子をとろうとしない。帽子に関するその二つのシーンから設定した問題が次の問題である。

問題①帽子に関するシーンが二回出てくるが，そのシーンは二人の少年のどのような違いを示していると考えられるか。

この映画にはそれ以外にも，類似の問題が二回出てくるシーンがある。

フランス人少年が夜，犬の泣き声がうるさいために犬の腹を引き裂いて殺す話が出てくる。それが原因となって罰として叔父の経営する会社に働きにいくことになるという意味でストーリー展開において重要な位置をしめている話である。フランス人少年に関してはそういう話が出てくるのに対して，ユダヤ人少年は，雨の中で飼い主に蹴られていた犬を救い，買い取ることになる。それらの犬をめぐる話二つから推論のための次のような問題を設定した。

問題②犬をめぐる話は，二人の少年のどのような違いを示していると考えられるか。

この映画において，フランス人少年とユダヤ人少年の関係を基本的に変えていく役割を果たす事件がある。時代背景が第二次世界大戦後のフランスであるため，アメリカ軍の物資の横流しとその物資の闇市がストーリーの一つとしてある。具体的にはその当時不足し貴重品となっていたアメリカ軍のガソリンの横流しと闇市をめぐる問題がそれであり，その闇ガソリンをめぐって主人公達が他のグループと奪いあう場面に入る。ユダヤ人少年の側は，火炎瓶を用意して相手グループと戦おうとするが，ユダヤ人少年自身は危険だからその戦いに参加しないと主張する。他方，フランス人少年の方はおもしろいからやろうという。ふたりの違いがあらわれるシーンの一つであるが，そこから次の問題を設定した。

問題③ガソリンを守るための火炎瓶闘争に対しての二人の少年の反応はどのように違いそれは二人の少年の性格の違いとどのようにつながっていると考えられるか。

ふたりの少年の違いが明確にあらわれているのではないが，この映画の中でいくつかの他のシーンと関係付けて考えることができるシーンが一つある。

フランス人少年が，叔父の会社を訪れたとき，飾ってある会社の創立者の銅像をみて彼は，創立者が斜視ではなかったか，と指摘する。その発言に対して叔父はあらためて自分の顔を鏡に映してみるというシーンである。そのシーンから次のような問題を考えた。

問題④フランス人少年フェリックスは，会社の創立者の銅像が斜視であることを指摘するが，そのことは，彼のどのような性格を表していると考えられるか。

フェリックスと同じように準主人公か，またはそれ以上の役割を果たしているのがユダヤ人の老人マックスであるが，この老人とユダヤ人少年ヴィクトールとの関係は映画の中で次第に変化していく。その変化の仕方は，マックスと比べるとおそらくは50歳近く若いフェリックスと，ヴィクトールとの関係と対照的である。そのことは，この映画において重要な意味を持っている可能性があることから次のような問題を設定している。

問題⑤老人マックスは，映画の中においてどのように変化したか。その変化を象徴しているものは何か。また，その変化はフェリックスと対比したときにどういう意味を持っていると考えられるか。

フェリックスとヴィクトールの関係を示しているシーンはいくつかあるが，その中でも次の問題となっているシーンは代表的なものと考えられる。

問題⑥フェリックスは，ヴィクトールと一緒に映画にいくために待ち合わせたとき，「君は足が疲れているからバスで行こう。」といい，それに対してヴィクトールは「疲れてないよ。どうして？」と聞き返す。この会話は二人の友情に関して何を表していると考えられるか。

以上６つの問題は，映画の中の具体的なシーンや台詞に関係する問題であるから，学生達の日常生活においてもそのまま実践的に応用できる問題ということになる。それに対して次の問題は，上の６つの問題と関係しているが，より映画全体に関係する一般的問題となっている。

問題⑦おとなになってからの二人と，少年時代のふたりはどのように違い，そのことはこの映画全体にとって，または監督の意図においてどのような意味を持っているか。

映画の最初に，大人になった二人の姿が示されているシーンがあるが，最初のシーンであるためストーリー的な関係付けが困難であることや，シーンの持続時間が相対的に短いこともあり，学生達の反応では，最初のシーンの内容や意味に気が付きにくいようである。それだけにそのシーンをどれだけ正確にキャッチしたかという感受性や観察力のテストとしてこの問題が役立つ面がある。

さらに映画全体に関係し，映画そのものの最終的なテーマに関係させるかたちで設定したのが次の二つの質問である。

問題⑧「悩みのない奴が人を悩ます」という台詞は，この映画全体との関係でどのような意味を持っていると考えられるか。

問題⑨この映画の監督は，二人の少年について最終的にはどのように考えていると思うか。また，そう思う根拠は何か。

問題⑧の台詞は，ユダヤ人の老人がユダヤ人の少年に向かって語る台詞でありストーリーとはそれほど関係ないかたちで映画の初期に出ている。年度によっては学生たちはこの台詞のところで笑う場合がある。ただこれまでの経験ではその頻度は大きくない。ジョークと受けとめられてもいい台詞であり，ユダヤ人老人はそのようにジョーク的なセリフをこれ以外にも語っている。一見この映画とは関係ないように見えるそのセリフが映画全体とどのように関係するかということは，この映画のことをどれだけ理解しているかの一つの基準になるのではないかと考えて，この問題を設定してある。

問題⑨は，実質的には問題⑧と密接な関係にある。問題⑧に答えることができれば，問題⑨は自動的に答えることができるが，逆の場合には両方とも答えられないという連動問題である。

それら二つを含めてここまでの問題は，映画という世界に閉じられた問題であり，映画だけに関係させて考えることができる。しかし，それだけでは科学や学問の推論のトレーニングとしてはかならずしも十分ではないと思われるのでより関係づけの距離が長くなるため推論が困難になる科学や学問の仮説につながるような推論の問題も設定している。

問題⑩ノーベル賞受賞者にユダヤ人の人たちが多いという仮説と，この映画の内容はどのような関係があると考えられるか。

問題⑪フェリックスとヴィクトールが，外国語の会話を学んだとき，どちらが早く上達する可能性があるか，その根拠とともに分析すること。

これらは，映画をきっかけに科学や学問の課題を発見してもらうという意図もあって出題しているものである。

(4)学生達の解答分析

前節で紹介した問題の順に，学生達の解答を分析していく。

問題①帽子に関するシーンが二回出てくるが，そのシーンは二人の少年のどのような違いを示していると考えられるか。

この問題に答えることができるためには，二つのシーンがなんらかのかたちで記憶に残っており，その時の場面をできるだけ詳しく思い出すことができることが必要である。そのためには，観る側の感受性の鋭さや観察力が求められるだろう。感受性が感覚と感情の二つから構成されているという仮説を立てるならば，この映画によって感情的に刺激さ

れた学生ほど，これらのシーンが記憶に強く残っている可能性がある。

感受性や感覚によってとらえた情報を根拠に二人の少年の違いについてどのような推論をたてるかというのが問題の内容であるが，学生達の答えから典型的なものをいくつか示すことにする。

「帽子をとるように叔父にも注意されたり，修道女に対しても帽子をとらなかったフェリックスは，人に対しての礼儀や敬意を表す気持ちに欠けており，また，そのことについて両親からもきちんと教育されてはいない。それに対して，修道女に対して誰にも注意されることもなくすぐに帽子をとったヴィクトールは礼儀や敬意の気持ちがきちんと身についており，両親とは幼い頃に別れてしまったがきちんと教育されたという違いを示していると考えられる。」

「フェリックスは自分を中心に考え，女性の前では帽子をぬぐという観念を持っていない。注意されても気が付かない。ヴィクトールは常にまわりをみて，女性の前では帽子を脱ぐという礼儀を備えている。」

これらふたつの解答の場合，学生達は，帽子に関係するシーンについて，どれほど詳しく憶えているかという問題は別にしても，一応は憶えていてそれに基づいて推論を組み立てている。この二つの解答例にみられるように，礼儀を知っているかどうかという視点から二人の違いについての推論を立てている例は上記の例以外にもある。しかし，映画の中の二つのシーンを分析してみるといくつかのことがわかる。まずその一つは，フェリックスが叔父に注意されたとき，叔父の皮肉を理解できず直接に叱られたときにわかるということである。すなわちものごとを敏感に感じ取っていない。別の一つのことは，叔父から叱られたときのフェリックスの反応である。彼は，即座に謝りながら帽子をとっている。そのことは，彼が女性の前では帽子を脱ぐことが礼儀であるということを知っていなかったのではないという推論を可能にする。さらに別のことは，そこで叔父に叱られたにもかかわらず二度同じ失敗をしていることである。別の言葉でいえば，前の失敗が教訓として生きていない，記憶に残っていない，といえる。このように前の経験を次の行動に生かすように記憶に残すことが感受性であるとすれば，フェリックスは感受性が鈍いのではないかという推論が成り立つ。それは，叔父の皮肉に敏感に反応できなかったことにも通じる。

学生達の解答例では 92 人のうち一人だけが，感受性という言葉を用いて解答しているが，むしろ相対的に多いのは次のような解答である。

「フェリックスは他人に気を使うという意識に欠けていると考えられる。一方ヴィクトールはささいな不作法が他人からいかに白い目でみられるか知っていて周囲の人に気を使う術を知っている。」

この解答例では「気をつかう」という言葉が，感受性の鋭さとの関係で重要であるだろう。というのは「気をつかう」ためには感受性の鋭さが必要であるからである。その意味でこういう解答をした学生達は，日本的な言い方によって感受性の違いの問題を指摘しているといえよう。気の使い方の違いを，ふたりの家庭環境に結びつけて解答している学生もいる。次のような例である。

「フランス人の少年は家柄もよく，人の様子などもあまり伺ったりしないが，ユダヤ人少年は育ちがよくないために自分がどう思われるかに敏感で，礼儀などをきちんと守ることを示している。」

厳密に考えた場合，家庭環境との関係についての推論には問題があるが，問題の一つの重要な側面についての推論といえるだろう。

問題②犬をめぐる話は，二人の少年のどのような違いを示していると考えられるか。

この問題は，学生たちにとっておそらくは，その内容の具体性からいって先の問題よりは考えることが容易ではないかと思われる。学生達の多くは，フェリックスの冷酷さと対比したヴィクトールの優しさについて書いている。たとえば次のような解答である。

「ヴィクトールは自分よりも弱い動物に対して思いやりを持っているが，フェリックスはそれを持っていない。」
「ヴィクトールはかわいそうと思う気持ちから犬を助けた。」

これらの解答も推論としては間違っていない。ただ，なぜフェリックスが思いやりを持っていないか，ヴィクトールがなぜ思いやりを持っているかについての推論が解答に含まれていないという問題点がある。

犬に関する違いの原因について確かな推論となるものは映画では示されていないので，次のような推論も推論として間違っているわけではない。

「ヴィクトールは犬が好き。」

しかし先の思いやりの問題にしろ，この好き嫌いの問題にしろ可能性はあるが，どちらも映画にその推論の根拠があるわけではない。老人マックスの場合には，犬が嫌いであるという台詞があり，またそれが嘘である理由も無いので，推論の必要はなく事実は明確であるが，ヴィクトールについてはそのような台詞はない。明確な根拠はないが，映画のストーリー全体とつなげた学生の場合には次のような推論を建てている。

「虐待される犬の姿にユダヤ人少年は自分やユダヤ民族の姿を重ねあわせる。しいた

げられる痛みを知っているユダヤ人少年は，目のまえで虐待される犬を必死で助けようとする。一方で，お金持ちのフランス人少年は，虐げられる痛みを知らないために自分より弱い犬を平気で殺すことができてしまう。痛みを知るものと知らないもの，その両者の違いが示されている。」

「ヴィクトールは飼い主にいじめられている犬をかばって飼うことになった。それはしいたげられている犬を自分と重ねて考えたからかも知れない。」

それら２人以外にも３人，合計５人の学生が類似の答えを書いている。これらの推論についても映画の中に明確な具体的根拠があるわけではない。ただ，先の帽子のことで立てた感受性の鋭さについての推論とつなげて考えると，フェリックスは生命や生命体の苦痛への感受性が鈍く，逆にヴィクトールはそれらへの感受性が鋭く，虐げられることへの同化が容易であるということになり，それら学生達の推論は間違っていない可能性がある。

問題③ガソリンを守るための火炎瓶闘争に対しての二人の少年の反応はどのように違い，それは二人の少年の性格の違いとどのようにつながっていると考えられるか。

映画のストーリー展開において人間関係の主要な変化をひきおこすものとしてこの闇ガソリンを守るための火炎瓶闘争がある。ガソリンを売る闇屋の青年が火炎瓶闘争を準備していることを知ったとき，ユダヤ人少年のヴィクトールは驚き，声を強めて危険だから参加しないと言い，友達のフェリックスとともにその場から離れようとする。それに対してフランス人少年のフェリックスは，おもしろいから参加するというヴィクトールとは違った意見を述べる。火炎瓶闘争についてのこの対照的な反応の中に二人の少年のものの考え方や感受性の違いが示されているシーンである。この火炎瓶闘争は結果的には，おもしろいから参加すると言ったフェリックスの足の怪我をもたらし，その結果，ヴィクトールとフェリックスの友人関係は終わることになる。

火炎瓶闘争が関係しているため印象に残る可能性があることもあり，ストーリーにおいて最も重要な場面と考えられるだけに，この映画を観た学生はこのシーンについてはよく憶えている可能性がある。したがって学生達の感受性のレヴェルはそれほど問題にならないだろう。純粋に推論力だけを問題にできるシーンであり，しかも二人が対照的な反応を示していることから，二人の違いを認識しやすいとも言える。加えて，このシーンが映画の後半に出ていることから，帽子の問題や犬の問題がすでに出ており，それらとの関係でとらえやすいということもある。しかし推論としては正確ではない解答も見付けだされる。

「ヴィクトールは相手が間違っているとしても人を傷つけるのを嫌がり，フェリックスは悪者をとことんこらしめるべきだと考えている。ヴィクトールが人権を重視し，相手を思いやるのに対し，フェリックスは正義感が強く，正義が悪を滅ぼすべきであるという考えにつながっている。」

ヴィクトールやフェリックスがなぜそのような行動をとったかという問題は人間の心の中への推論であり，さまざまな場合の可能性がある。上記の解答の後半に書かれていることも一つの可能性としてはありうるが，「人権」や「正義感」については映画の中にほとんど根拠や手がかりがない。その意味で推論としては十分ではない。科学的な推論の場合には，かならず根拠を示すことが必要となるから，上記のような解答は根拠の欠如の問題を学生達に示すための材料として役立つ。根拠がないか明確でない場合に推論として大事なことは，それ以外の可能性や，一つの推論を否定する逆の推論を立てることである。ある問題に関してどれだけ多くの可能性を考えられるかということは，推論力を測定する一つの重要な基準である。なぜなら，感覚ではとらえられないものをとらえるのが推論であるからどこに真理があるかは未知であり，それだけにさまざまな可能性を検討できなければ真理を発見できないからであり，その可能性についての思考の幅こそ推論の幅と考えられるからである。

このシーンだけではなく前のシーンに根拠を求めている次のような解答もある。

「一人は争いを好み，もう一人は争いを嫌っていることが前述の犬の話からもわかる。」

この解答においては犬の話と結びつけて根拠にしている点が推論として評価できるが，しかし，犬の話が「争いを嫌っていること」についての根拠になるかどうかは疑わしい。というのはヴィクトールは，雇い主の老人と映画の中で何度か口喧嘩をしており，また，フェリックスに対しても怒るシーンがあるからである。その意味ではむしろ「争い」とつなげるよりも「危険」とつなげる推論の方が適切である。

類似の解答としては次のものがある。

「フェリックスは乗り気，ヴィクトールは乗り気ではない。フェリックスは攻撃的な性格で，ヴィクトールはできれば穏やかに事をすませたいという控えめな性格とつながっている。」

攻撃的な性格ということでは，犬の腹を引き裂いて殺したということが根拠となるが，しかし，それはむしろ残酷な性格と呼んだほうがいいように思われる，上で触れたようにヴィクトールに関することからの反証も可能だからである。同じことは「控えめな性格」ということについてもいえる。

未来に関する思考力と関係づけた推論がいくつかあるが，その一つの例が次のような解答である。

「フェリックスは何の困難もなく，召使や親に守られて育ったため，次にどんな危険がまちうけているかなど，考える必要がなかったと思われる。」

この解答の前半については,「何の困難もなく」という推論をのぞけば映画の中にその根拠となるシーンがいくつかあるために推論としては正しい。後半についてはものごとの認識としては正しい可能性がある。それは，人間の考える力や推論力についての一般的な仮説を立てることにもつながり，また，デカルトの次のようなとらえかたにもつながっている。

「いったい空理を真実らしいものに見せようと労すれば労するほど，いよいよ多くの才知や作為を用いなければならなくなり，常識を遠ざかれば遠ざかるだけ多くの空なるものをそこに見出すであろうし，それ以外に何ひとつ実現することなく，おのれに何の影響も与えぬ空理のために，学者たちが書斎であやつる推論においてよりは，一つ判断をあやまればすぐにも処罰されねばならぬ結果をきたすような，おのれにとって重大なことのために各人がこころみる推論においてこそ，はるかに多くの真理にであうことができようと思われたからである。」[4]

このデカルトの文章とのつながりでは，この学生は問題の重要な面をとらえ推論しているといえる。攻撃的な性格や，争いが好きか嫌いかという問題としてとらえた先の学生達よりもより抽象度が高い思考力という側面で問題をとらえている点で，この学生の推論は評価できる。しかし，映画のシーンに即して考えると，ヴィクトールは火炎瓶闘争を知ったときに時間的にはほとんど瞬間的に反応しており，むしろ彼の行動は条件反射的反応といえる。条件反射的スピードで推論や思考が可能なケースも考えられないわけではないが，この場合はやはり感覚的な条件反射反応であると考えた方が適切ではないかと考えられる。だとすれば，ここでヴィクトールとフェリックスの違いとして表れているのは，危険なことに対する感受性の違いであると考えた方がいいだろう。そして帽子の件でも，犬の件でもそうであったように，このシーンにおいても重ねて明らかになっているのはユダヤ人少年ヴィクトールの感受性の鋭さであるといえよう。

問題④フランス人少年フェリックスは，会社の創立者の銅像が斜視であることを指摘するが，そのことは，彼のどのような性格を表していると考えられるか。

このシーンと類似のシーンが映画の中にはほかにもある。たとえば，ヴィクトールが映画の字幕のことを知らないことがわかったときフェリックスが笑い，その笑いにヴィクトールが怒るシーンである。その意味では帽子や犬のシーンと同じように類似のシーンがなぜか2回くりかえされている。それが製作者の意図によるものか，単に偶然の一致なのかは明確な根拠がないためわからない。

このシーンについての学生達の答えはさまざまであり，他の解答よりも多様性に富んでいる。いくつか具体的な解答を示そう。

「えらい人を素直に尊敬することができる性格。」

この解答は，斜視を指摘することがどうして尊敬につながるのか理解不可能である。

「普通の人なら気にもとめないような変に細かいことを気にする性格である。」

この解答には科学的な立場からみていくつか問題がある。「普通の人」というとらえかたと「変に細かいこと」というところに問題があるが，この問題は，別稿であつかう予定である。「細かいことを気にする性格」という推論については，映画のいくつかのシーンが反証となる。たとえば，すでに触れた帽子の問題にしろ犬の問題にしろ，むしろ「細かいことを気にしない性格」の根拠となりうるからである。その意味でこの推論は間違っている。

「自分の気に入らないものは差別，排除しようとする。」という解答もある。しかし，斜視であることがフェリックスにとって気に入らないものであるという根拠は何もないし，差別，排除しようとしているという根拠もない。むしろ映画のシーンに即していうと，フェリックスは平然と指摘している。したがってこの解答は，このシーンとこの映画に即した推論とはいえない。

おそらくは正しい推論の一つであると考えられるのが次の解答である。

「斜視であること，一般的に失礼であることも堂々という点が無邪気である。」

一般的に失礼といえるかどうかということについての問題は残るが，推論としては，フェリックスの性格の側面をいいあてていると考えられる。

次の解答は，このシーンそのものから離れてより一般的なかたちで述べている点が他の学生の解答と比べて特徴的である。

「自分の思ったことを深く考えずすぐに口に出してしまう性格。話している相手がそれを聞いてどう思うか深く考えない性格。」

前の解答のように推論の根拠が述べられていないという欠点はあるが，推論そのものにおいては，フェリックスという経済的に豊かな家庭で親に愛されて育った子供の思考構造をいいあてている部分があり，先のデカルトの認識とも一致する。

次の解答も，推論としては優れていると考えられるが，表現は学問的ではない。

「細かいところに目がいく点で好奇心旺盛であると同時に，人がいわれて不愉快になることを平気で言う点で無神経である。」

日常語としては，このようなシーンに対して「無神経」という言葉がおそらくは的確な表現であると思われるが，その定義は必ずしも容易ではないという意味で学問的表現としては変える必要があるが，推論としては正しい可能性が高い。

以上みたように学生の何人かが，このシーンをもとに正確な推論を建てている。このシーンはフェリックスの思考力・推論力の欠如を示すものの一つと考えられ，そのことは後述するように映画全体のテーマと密接な関係を持ってくることになる。

問題⑤老人マックスは，映画の中においてどのように変化したか。その変化を象徴しているものは何か。また，その変化はフェリックスと対比したときにどういう意味を持っていると考えられるか。

この問題について推論をたてる場合に，一番根拠となりうることは，ヴィクトールが助けた犬に対するマックスのかかわり方である。その犬を飼うことについて，マックスは最初は店の商品を汚すということで反対する。反対されたヴィクトールは犬を飼うためにその店をやめようとする。結局，ヴィクトールが店を出ていくことをやめさせるためにマックスは犬を飼うことを承知する。そのような展開で，ヴィクトールが助けた犬がその後のストーリーに入ってくることになる。最初反対していたマックスの犬に対する姿勢は，映画の最後に向かって，犬を受け入れるかたちで変化していき，最後には犬への愛情を示すようになる。助けられた犬へのマックスの姿勢の変化は，そのままヴィクトールに対する姿勢に関してもあてはまる。というのは，最初ヴィクトールを屋根裏部屋に住まわせていたマックスが，映画の最後には，自宅に家族同様に住まわせることになり，映画の最初の1980年代のシーンから推測すると，遺産をヴィクトールに渡した可能性があるからである。そのような変化の背後には，マックスがヴィクトールをより深く理解し愛していく彼自身の変化があると考えられる。

マックスがそのように変化するきっかけとなったことの一つに，彼が腰をいためてしばらく動けなくなるという事件がある。それに対してフェリックスは，火炎瓶闘争で脚に怪我をし，動けなくなる。マックスが自分の肉体的障害をヴィクトール理解のきっかけにしていくのに対し，フェリックスは肉体的障害をヴィクトールとの関係断絶のきっかけにしていく。この類似のふたつの事件が製作者の意図によるものか，偶然の一致によるものか，映画の中に明確な根拠はない。しかし，ストーリーの上では肉体的障害によってストーリー展開は逆転していくことになる。最初はフランス人少年とユダヤ人少年の友情物語であったのが，最後には，ユダヤ人少年とユダヤ人老人の年令をこえた友情や連帯の物語になっていく。といってユダヤ人の民族的連帯の話なのではない。なぜなら，ユダヤ人老人の近所のフランス人住民との民族を越えた連帯も描かれているからである。そのことからいうと，最後に向けて描かれるのは，年令を越えた，苦しみや悲しみの中で生きる人間同士の連帯であることになる。最初は二人の少年の友情物語ではじまり，学生達もそのつもりで観ているため，学生によっては途中でストーリーが理解できなくなることもある。

以上みたように，犬をめぐるマックスの態度の変化はこの映画全体においても重要な意味を持っている可能性がある。それだけにそこまで考えた学生達の答えはまったくない。

代表的な解答例を示して置く。

「老人マックスはヴィクトールに会うことで信頼するということを憶えたように思える。映画の進行とともにヴィクトールに我が子のように愛情を注いでいる。ヴィクトールがベッドで泣いているときになぐさめるシーンはその変化を象徴している。」

この推論の一つの問題点は，マックスがヴィクトールに会うことで信頼することを憶えたのではないだろうという点である。彼が強制収容所で失った妻や子との関係において信頼はあった可能性がある。しかし，ユダヤ人として経験しなければならなかった現実は他人への不信と警戒であり，他人への信頼を心の奥深く閉じこめさせたであろう。その仮説からいうと，マックスはヴィクトールという感受性の鋭い，まじめで愛情深い少年と出会うことによって，他人への信頼を再びよみがえらせたということになる。

「孤独だと思っていた老人が，ヴィクトールとの関係を築き，幸せだと感じるようになる。孤独だと言っていた時は，ヴィクトールだけではなく何もうけつけないで犬も嫌いだと言うが，次第に犬にも声をかけて大切にする。マックス老人の変化の象徴は犬だと思う。」

この解答は他の学生の解答にも共通する標準的な解答である。その意味では学生達の標準的な思考力や推論力を示しているといえよう。

問題⑥フェリックスは，ヴィクトールと一緒に映画にいくために待ちあわせたとき，「君は足が疲れているからバスで行こう。」といい，それに対してヴィクトールは「疲れてないよ。どうして？」と聞き返す。この会話は二人の友情に関して何を表していると考えられるか。

この問題は，学生の日常生活の友人関係にも関係する可能性があるからか，少数の学生は他の学生たちとは違った個性的な解答を寄せている。

「フェリックスにとってヴィクトールは自分より弱者であるという意識があるように思う。」

最初のこの解答は，フェリックスの心理の重要ポイントを明確に指摘している。二人の出会いは，初めてパリに来て道がわからず迷っているヴィクトールをフェリックスが助けるというということにあった。弱者とその保護者という関係が最初に設定されている。それがフェリックスの心理を支配していることは推論として間違っていない。

さらに次の学生はその問題について友情という視点から推論を組み立てている。

「フェリックスはヴィクトールに同情しているだけで，対等な友情ではなく，少し差別の感情がまじっている。」

最後にある「差別の感情がまじっている」というのは推論としての根拠を上げるのが容易ではないだろう。相手を自分より弱者と考えることは，現実的な認識の上に立った区別でもありうるから，かならずしも差別とはいえない。問題は弱者についての測定基準にある。たとえば，所得の多少を経済力と考えるなら，所得の少ない人は所得の多い人よりも弱者であると定義可能である。そしてその定義自体は，差別ではなく区別である。しかしそのような定義に基づく弱者として位置付けが他の面にも無条件に拡大されて人間全体についての認識となるのであれば，それは偏見であり差別観となりうる。そのように考えるなら，フェリックスがヴィクトールをパリの街を知らないゆえに弱者と考えること自体は差別ではない。しかし，そのことから「君は足が疲れているから」と一方的に決め付けることは，差別観でありうる可能性が強い。

その解答で重要な点は，「対等な友情ではなく」という表現を用いている点である。差別とは関係ないとしても，対等な友情ではないということはいえるだろう。そのことを別の学生はより詳しく次のようにまとめている。

> 「フェリックスはヴィクトールの足が疲れていると勝手に思い込んで決めている。本来友情とは対等な関係であるはずなのに，このシーンから，自分の考えが正しい，自分の考えることはヴィクトールも考えている，といったフェリックスの自己中心的で一方的通行の考えがみられる。このことは，二人の友情が相互的で対等な関係の上に成り立っていないことを表していると考えられる。」

この解答の中にある，「自分の考えが正しい」「自分の考えることはヴィクトールも考えている」といったことについての根拠はこのシーンそのものにはないが，フェリックスの自己中心的で一方通行の考えについては映画の中の根拠により論証可能であるから，これらのことも推論として成り立つ可能性がある。論証可能であるというのは，この映画の中で経済的に豊かなフェリックスが自分の持っているものをヴィクトールの考えを聞かずに与えるシーンが2回あるからである。ただ，これらは問題のシーンそのものにとってはむしろ傍証といった方がいい。問題のシーンそのものについては推論の根拠が十分に示されていないため，次のようなさまざまな解答がなされている。

> 「ヴィクトールには苦にならない仕事でも，フェリックスは自分の感覚から足に気づかわなければいけないような仕事に思えた。」
> 「実はフェリックスが疲れていてバスにのりたかったが，言い出せなくて相手に気遣うふりをしたのである。」
> 「フェリックスは自分が疲れるのが嫌だから，バスで行こう，と言ったが，ヴィクトールはその意図がつかめないので，どうして，と聞いている。」

映画のこのシーンだけに限定して推論を立てた場合にはどの推論も根拠はないから，ど

の推論も同じだけの確かさを持っていることになる。しかし，このシーンが台詞をともなったシーンであること，なくてもいいシーンであるにもかかわらず設定されていることなどから，映画全体のストーリーと関係づけるならば，フェリックスのヴィクトールに対する関係が本当の友情ではないという推論の根拠となりうると考えられる。そして映画の最後のシーンのナレーションからも明らかになるとおり，フェリックスは成人して，店の襲撃事件でヴィクトールのことを思い出したときでも，弱者との関係という意識を持っている。いいかえれば，フェリックスのヴィクトールに対する関係に変化は一貫してみられない。変化がみられないということは，マックスのようにヴィクトールをより深く理解するような関係を作れなかったということになる。その意味で，先に述べたマックスの人間としての可変性と対照的にフェリックスの不変性（柔軟性の欠如）が描かれる一つの材料になっているのがこのシーンであると考えられる。

問題⑦おとなになってからの二人と，少年時代のふたりはどのように違い，そのことはこの映画全体にとって，または監督の意図においてどのような意味を持っているか。

すでにふれたように，映画の冒頭で，成人したおそらくは中年と思われるヴィクトールとフェリックスが出てくる。しかし，そのシーンは人によって違うとはいえ，観る側にとってはやはりわかりにくい可能性がある。実際，授業で最後まで一度みたあとで最初のシーンだけもう一度くりかえしてみると学生達に驚きの反応が生じることから，その可能性は強いと思われる。映画のシーンをどのように受けとめるかは人によって違い，かならずしも一般的にいえるわけではないが，ヴィクトールの方がエネルギーに満ちて元気があると感じる人が多いようである。たとえば次のような解答例である。

「ヴィクトールは強いしんのある大人に成長した。少年時代はユダヤ人であることを受け入れられず隠そうとさえしていたが大人になってからはありのままの自分を受け入れ，店が強盗にあっても屈せず，堂々と自分の名前を名乗るようになっていた。」

しかし，このような変化に少しでも気が付いている正解に近い解答は，他の問題にくらべて相対的に少ない方に入る。解答者92人のうち正解に近い解答は10人であり，10.1%となる。授業において最後にもう一度あらためて最初の部分をみているにもかかわらずそのような結果になっている。数は少ないにもかかわらず一人だけ優れた分析をしている学生がいる。昼間主１年のＴさんという女性である。

「大人になってからのヴィクトールとフェリックスは少年期の彼らと立場が逆転しているように思う。幼い頃のヴィクトールはおどおどしていて控えめであり，フェリックスの方が堂々としているが，大人になるとヴィクトールの方が人間としてしっかりした印象を与える。どこか影を背負っているのはフェリックスである。これは逆境の中で育つ人間と裕福な中で育つ人間との人間形成の根本的差異によるものであり，映

画の中でも中心のテーマであると考えられる。」

大人になってからの二人の相違は，俳優自体の個性の相違にも関係していると思われるが，ストーリー全体との関係ではこのＴさんの推論が成り立つように考えられる。彼女が書いている立場の逆転は，すでに触れた映画の中の中心的人間関係の逆転となんらかのつながりがある可能性もある。また，最初は中心となっていたヴィクトールとフェリックスの関係が，映画の最後では逆転し，老人マックスとの関係が重要となることと関係がある可能性もある。実際，映画の最初に出てくる成人したヴィクトールがマックスと似ていると感じる人がいるだろう。偶然そうなっているのでなければ，この問題はＴさんが後半で書いているように映画の中心的なテーマと関係があることになる。

この問題⑦のような場合，学生達の思考力の差がより明確になる。Ｔさんの分析はそのまま卒論で映画や文学の分析をしても通用するようなレヴェルにまで達している。同じように受験勉強をし，同じような成績で大学に入っているにもかかわらずこのような差があることは，思考力や推論力と受験教育がほとんど関係がないことを考えさせる一つの重要な材料である。

問題⑧「悩みのない奴が人を悩ます」という台詞は，この映画全体との関係でどのような意味を持っていると考えられるか。

マックスが語るこの台詞は映画全体と密接な関係がある可能性がある。とくに後半の火炎瓶闘争をめぐるフェリックスとヴィクトールの関係に注目すると，その問題への推論が可能になる。面白いからと言って火炎瓶闘争に参加したフェリックスは，自分の不注意から怪我をし，ヴィクトールを悩ませ，友情を断ち切り，悲しませることになる。犬を殺した事件についても，銅像の斜視の問題も，映画の字幕の問題も，フェリックスの思考力の欠如，すなわち悩みの欠如によって他人を苦しませるという関係を示している。ということはそれらを根拠として，悩みのない奴＝フェリックスということについての推論が成り立つことになる。

このことに学生達が気が付くのは困難ではないかと筆者は予想していたが，筆者の予想を裏切って，20 人の学生がそのような答えを出している。ただ，推論の根拠は十分には述べられていない。参加者の総数が 92 人であるから，全体の 26.3%が答えを出したことになる。すべて女性である。男子学生は全部で 18 人いるが正解を書いている学生は一人もいない。20 人の女性のうち昼間主の学生が 16 人で，昼間主学生全体のうちの 23.5%である。他方夜間主の学生は 4 人であり，16.7%となるが，夜間主の学生の総数そのものが少ないので，母集団が多ければ昼間主の値と重なる可能性がある。

この問題も前の問題と同じで，学生間の差が明確にあらわれる問題であり，学生の思考力や推論力の差が示される。

問題⑨この映画の監督は，二人の少年について最終的にはどのように考えていると思うか。

また，そう思う根拠は何か。

この問題についてまったく書いていない学生は56人であり，60.1%になる。この数値は，これまでの問題の中では最も高い数値となっている。また，何かを書いているがまとはずれなことを書いている学生は20人おり，書いていない学生と合計すると，82.6%の学生が答えていないことになる。これはおそらくこの問題が前の問題⑧以上に抽象的で映画全体に関係する質問だからではないかと思われる。このことは，学生達の概念的思考のレヴェルの低さを示す可能性があるが，このデータだけでは不十分でありさらに詳しい分析が必要であるだろう。

文章の意味がそれなりにまとまっていると考えられる答えのいくつかを次に取り出してみる。

「これまでと違った環境で育った二人がお互いに友情を感じ，互いに尊重し，自分にはない部分をまのあたりにして生き方へ考えを深め成長していく様を映画で表現しているので望ましい友情のあり方だと考えていると思う。」

文章内容的には明確であるが，今まで個別的に分析してきたことからいうと，製作者の意図とは反対の推論を立てているともいえるだろう。同じような答えが，次の答えである。

「大人になったフェリックスがヴィクトールを思い出すことから，二人には真の友情が芽生えはじめていたと考えていると思う。ただ，二人が子供だったためにまわりの環境や自分の心に潜む排他的な心にギャップを感じて離れてしまったのだろう。」

この答えの場合には，「真の友情」の定義にもよるが，お互いのことを理解しあう対等な関係ということからいうと，これまでの分析からわかるようにフェリックスにそのような関係をつくる力があったとは思えない。ということは，まわりの環境が映画のような環境ではなく友情に好都合であったとしても，いずれは破綻する関係であったという推論が成り立つことになる。友情に関する推論のこのような間違いは6人いることから，そのような誤解を生じさせやすい面をこの映画は持っているといえる。だからこそ，推論力育成のための教材としては有効な教材であるのである。

それらの推論とは全く逆の推論を立てている学生もいる。

「ヴィクトールは苦しいことをかみしめてとても大人になった。同時にフェリックスのように一見優しさにあふれた行為をするが実は傲慢な人がいるということを指摘していると思う。」

二人の友情について否定的なこの解答では，映画の中のシーンからそのような推論を立

てることも不可能ではない「傲慢」という言葉で表現している点が特徴的である。帽子の件も，犬の件も，字幕の件もそのような証拠となりうるからである。次の指摘も同じような視点からのものである。

「フェリックスはユダヤ人であるヴィクトールを直接的に苦しめることになる。フェリックスは過去の友情を忘れはしないが，弱者の立場を理解しないし，他者は自分のためのものと考えている様子もあるように思う。大人になった彼はユダヤ人であるゆえにヴィクトールを苦しめる可能性もある。」

ユダヤ人差別の問題にまで広げた推論である。根拠そのものは十分に展開されていないが，おそらくこれは製作者の二人の少年への位置付けに関係する可能性が強い推論である。というのは，映画の分析から出てくる推論としての結論は，フェリックスが他人や命に対する感受性が鈍感であり，また，思考力もないということだからである。逆にいえば，他人や命に対する感受性が鋭く，思考力があれば差別され迫害されるユダヤ人の気持ちを理解できるし，その内面を感受性でもって共有できる可能性があるからである。もちろん感受性と思考力は，友人の心を理解するうえでも不可欠ということになるからお互いをより理解しあった友情が成立するために不可欠だといえる。ユダヤ人老人のマックスとの間では，マックスの感受性の高さや思考力ゆえに連帯が成り立つが，そうではないフェリックスとの間では成り立たない。あくまでも推論であるから，最終的な断定はできない。最終的に断定するためには製作者達のこの映画についての証言が必要であるが，本稿の時点では見付けだせない。

感受性と思考力のレヴェルの問題は，先のデカルトの指摘にもつながり，次のような仮説設定を可能にする。ユダヤ人達の感受性と思考力のレヴェルは，その社会的地位，差別や迫害可能性などで定義しうる社会的弱者性と正の相関関係にあるという仮説である。より一般的にいえば，人間の感受性と思考力の度合いと社会的弱者の度合いは正の相関関係にあるということになる。その仮説はまた次のことを意味している。感受性と思考力が人間の認識力の重要な部分を占めるとすれば，社会的弱者はたしかに社会的にみれば弱者であるが，認識力という面からみると強者であるということである。この仮説的推論の直接的根拠となることとしては，最後の「サンドイッチの年」という謎の解明と，成人してからの二人の姿が上げられる。

問題⑩ノーベル賞受賞者にユダヤ人の人たちが多いという仮説と，この映画の内容はどのような関係があると考えられるか。

問題⑪フェリックスとヴィクトールが，外国語の会話を学んだとき，どちらが早く上達する可能性があるか，その根拠とともに分析すること。

最後のふたつの問題は，思考力と感受性についての問題であり，映画から離れてより一般的な問題への推論訓練として出してある。

まず問題⑩についてである。この質問に全く答えていない学生は 19 人で，解答総数の 20.7%にあたる。問題⑨と比較すると，こちらの方が映画と直接関係がない分だけ問題の抽象度は高いと考えられるが，解答率は問題⑨よりは高い。しかし，解答のほとんどは映画に根拠を持たない推論となっている。

「ユダヤ人が高い水準で教育を受けていることに関係があると考えられる。」

この解答では，映画の中に教育の問題がまったくでていないため，映画の中に根拠を持っていない。

「抑圧・迫害される境遇の人はその力をバネにできるということで似ていると思われる。」

この解答も抑圧や迫害とバネの関係問題についての根拠が映画にはないことから映画とは無関係となる。

「ユダヤ人達は自らの能力をみがくことにより，社会に認められようとした。よって優秀な人も多かった。そういった勤勉さがヴィクトールにもあると思う。」

これも，ヴィクトールの勤勉さの証明を映画の中に見付けだすことはできないという意味で根拠がないことになる。

「人種ということを述べるのはあまり良くないように思える。」

この解答の場合には，事実関係についての推論と価値観との混同があり，推論は立てられていない。このような価値観による解答はほかにもあるが，共に男子学生である。そのことに意味や理由があるかどうかは不明である。

映画の内容に関係するかたちでこの問題について推論を立てている例の方をあげる。

「自分が困難な状況に置かれたり，悩むような問題がある人はその状況について深く考えることも多いと思われる。」

映画の中の根拠は示されていないが，映画の最後の部分と一致することから映画を意識しながら書いた解答と考えられる。

根拠という点では不十分ではあるが，問題を他の学生よりも明確にとらえている稀な例が次の解答である。

「悩むということは考えるということと同じである。ユダヤ人の人たちは差別を受けていたため，悩む内容が他の人より深刻で，また頻繁であったと思う。それゆえそのことが物事を深く考えたり，分析する能力を発達させたと思う。」

この解答は，その他の解答とくらべるとその問題の整理のしかたにおいて優れており，同じ大学生といってもその間にある差が大きい可能性があることを示唆している。

問題としては，その解答の内容に加えて，フランス文化とユダヤ文化の両方をもって二つの文明の視点を持ったマージナルな状況にいたことや，多数派のフランス文明に対してマックスが示しているような批判的距離を持っていたことなどがあげられるが，1・2年生の場合には，最後のような解答が書ければ十分ではないかと思われる。なぜなら，このような指摘をしている学生は全部で6人であり，全体の6.5%であるからである。

問題⑪については全体の32.6%にあたる学生が解答しておらず前の問題よりは解答率が低くなっている。問題の最後にあったため時間がなかった可能性もある。出題の意図としては感受性の問題と関係づけて推論をたてることを望んでいたが，感受性という言葉を使って解答しているのは次の解答だけである。

「ヴィクトールは感受性豊か。ピュアな感じでいろんなことをすぐに吸収しそうである。人の気持ちを理解しようとする姿勢が外国語を学ぶのに向いていると思う。」

感受性という言葉は用いていないが実質的に同じことを指摘している解答としては次のような例がある。

「他人をきづかうヴィクトールの方が上達できそうと思う。言語を学ぶとき，とくに会話を上達させる方法としては人を真似するのが大事だと思うので。」

問題をよく把握している解答であるが，どうしてヴィクトールが人を真似するのがうまいといえるのかの根拠を書いていない点で不十分である。真似する力にもつながるヴィクトールの素直さを指摘している学生は複数いるが，その一つが次の例である。

「ヴィクトールの方が早く上達すると考えられる。なぜなら，ヴィクトールは素直で勤勉であること，帽子のシーンにみられるように，フェリックスは教わったことをすぐ忘れてしまうが，ヴィクトールはいつまでも憶えているからである。」

この解答はその後半の部分において他の学生の解答と違っている。帽子の件と記憶を結びつけており，感受性という言葉は用いられていないが，問題の重要なポイントを把握していると考えられる。

感受性につながる問題を次のようにとらえている解答もある。

「ユダヤ人のヴィクトールには人に認めてもらいたいという願望がつよく一生懸命になれるから。」

映画の中に人に認めてもらいたいという願望の強さについての証拠を見付けだすのは容易ではないが，友情への渇望が描かれていることなどは一つの根拠となりうる。また感受性と社会的弱者であることとは関係があり，感受性というものが自分を認める他人に向けられるものであるとすれば，この解答は感受性の問題をも指摘していると言えよう。

むすびにかえて

本文の中でもみたように，フランス映画『サンドイッチの年』は学生たちにとって理解しやすい映画ではない。その原因は，登場人物の性格や心理やストーリー展開を示すさまざまの事実が映画の中に散在していることにある。それらの散在している事実に気がつくことがまず必要である。気がついたとしても，それらの関係は，映画の中では直接的に示されていなく，また映画のセリフのような言語表現でも示されていない。したがって，学生たちはそれらの事実を結びつける論理，すなわち自分の推論を自分の力で組み立てざるをえない。しかもその論理的組み立てに直接参考になる知識があるわけではなく，これまでの人生経験や学習したすべての知識を総合的に参考にしながら自分で組み立てることになる。

その作業は映画という擬似現実の中から課題を見つけ出し，自分なりの論理的仮説をたて，その仮説を証明する根拠を映画の中に探しだす作業に他ならない。映画は現実そのものではないが，しかし，言語化されたもの，たとえば文学作品や学問的研究よりは現実に近いから，その作業は現実という整理されていないカオスそのものから整理された学問や科学を作りだす作業に近くなるといえるだろう。それは，欧米人たちが整理されていない現実というカオスの中から作り出した学問・科学を整理されたものとして学んできたこれまでの日本の科学教育とは違ったより根本的な科学教育となる可能性がある。そしてそれは単に整理された知識の中からだけ学ぶことによって得られる独創性よりも多くの独創性を身に付ける教育となる可能性があるといえる。

注

(1)大学審議会答申「平成5年度以降の高等教育の計画的整備について」(『文部公報』平成3年5月18日号)，大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について－競争的環境の中で個性が輝く大学－」(『文部公報』平成10年10月26日号)

(2)以前は株式会社ハミングバードよりVHSのビデオが発売されていたが現在（2002年9月30日）日本では絶版となっており，DVDでも発売されていない。筆者の経験では，中古ビデオ市場に出ている場合もある。

(3)「ふたつのフランス映画への学生たちの反応とそれらが科学教育において持っている意味」(大阪

外国語大学フランス語研究室発行『études françaises』35，2002年3月31日）

(4)落合太郎訳『方法序説』岩波文庫，p.20。一般的なアクセスの容易さや普及度を考慮してフランス語版からの訳を使っていない。

（2002．10．9受理）